

島津伝 ～平凡な高校生がチート無しで戦国時代にタイムトラベルしたら現代知識無双で天下をとって織田の姫様たちとハーレムで地球を征服しちやうまでロケットで突き進むぜ～

えんどうこいち

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

平凡でなんの取り柄もない高校生、島津刹那が戦国時代にチート無しでタイムトラベルしてしまう。

だけど彼は現代知識とAK-47で無双して織田の姫様とハーレムしながら天下を取り島津家を立ち上げちゃうお話です。

# 目次

運命の出会い	1
猛追！恐怖の徳川軍！	8

## 運命の出会い

「我こそは三河最強の武士、本田忠勝なるぞ！我が槍の血錆びにしてくれる」

俺の目の前に立つ身の丈3メートル近くある巨体の男が電柱柱のような槍を振り回しながら駆けてくる。普通の足軽ならそんな状況なら無我夢中で逃げるか、恐怖で足がすくんでなすすべなく殺されるだろう。だが俺の心にはそんな恐怖心など微塵も湧かなかつた。俺の手にあるのはそんな猪武者など容易く屠れる凶器があるからだ。

俺がその凶器を優しく撫で、向かってくる武士へと静かに構え、そしてトリガーを引いた。軽い破裂音が連続して鳴り、本田忠勝の頭が呆気なく破裂し、頭部を無くした身体はどうっと倒れ臥す。

「ば、ばかな…俺の槍は天下無双…それをこうも容易く破るとは…さでは名のある武将か…名を…俺を破ったお前の名を…教えてくれ」  
倒れ伏した本田忠勝は最後の力を振り絞り尋ねてくる。

「否、俺はただの高校生。名は島津利那」

「まさか、ただの高校生って…高校生？えっと高校生ってなんだっけ？」

怪訝に首を傾げる瀕死の本多忠勝。

「高校生とはなにか？それはとても哲学的な問だな。俺も高校生とは何かなど、真剣に考えたことはなかった。そもそも人はなぜ学ぶのか。それはとても根源的な問だ。ただ人が人らしく生きるだけならば中学生レベルの学力だけで十分ではないのか？だが世間では中卒は人とはみなされないというのがこの悲しい現実であるな。高卒でも就職は覚束ないし、苦学して大学まで卒業してもこの不況下では就職は困難。大学院までいくと今度は年齢の問題で更に就職が厳しい。実際、俺の親父は大学出だが社会に出て大学レベルの知識を問われることはほぼないそうだ。母親だって学生時代真面目に勉強なんてしなかつたらしいが仕事ではバリバリ活躍できてるらしいぞ。そんな中でなぜ人は高校生になり、そして大学まで進むのか。学びたいものがあるのか？それとも流されているのか？俺は一体どちらなのだろう

うか？お前はどうかだ？」

「意味がわからん。無念なり」

俺の長々とした話を聞き、悔しそうな声をあげ、本田忠勝は息を引き取った。

勝って兜の緒を締めよ。俺は油断なく銃口を更に先へ向ける。そこには万を超える足軽兵と絢爛豪華な鎧を着て馬に乗ったたぬきのような壮年の武将がいる。たぬきのような武将は顔を真っ赤にして殺気を飛ばしている。

それを俺は冷静に観察しながら、こうなつた経緯を思い返していた。

時刻は1時間ほど遡る。

特に取り柄もなく、退屈な日々を無為に過ごす毎日、そんな日々を飽き飽きとしながらもどこか安らぎを感じる、そんなどこにでもいる平凡な高校生の俺は今日も朝5時に目が覚めた。

高校も2年になつた俺は将来の進路の為に、1時間ほど勉強をして、そして日課の鍛錬の為に裏山に登つた。

俺の家は元々鹿児島島の武闘派大名、島津家の数少ない生き残りだ。関ヶ原の戦いで西軍についた俺の祖先は憎き徳川家に敗退して命からがら薩摩まで逃げ帰つた。その後はみんな知つての通り徳川の世になり、島津家の生き残りは薩摩の地に隠れ住んでいた。そして細々と命を長らえ、長州藩と薩摩藩が江戸幕府を倒した時にはもう曾祖父さん一人だけが生き残つていた最後の島津家だつたそうだ。

曾祖父さんの両親は産まれてすぐ徳川の暗殺者に捕まり殺されてしまったそうだ。まだ自分の出自すら理解できない子供ですら容赦なく殺す徳川の血も涙もない仕打ちに曾祖父さんは両親の敵を取るべく修行に明け暮れていたが、山籠りから里に降りた頃にはもう江戸幕府は倒れ、徳川家は全員晒し首にされていた。曾祖父さんはとうとう復讐に間に合わなかった。だからいつ何が起こってもすぐに復讐できるように日頃から鍛錬を欠かさず己の力を磨けと、爺さんの代からの掟になつたのだ。

そして俺の爺さん、父さん、母さんはその掟を守り、常に戦場で戦い続けた。

爺さんは日露戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦を戦い抜き、戦後はどこの国にも属さない正義の戦士としてベトナム戦争や中東などで戦い、父さん母さんも物心ついた頃からアフガニスタンや中東などで激しい戦いを現在でも続けている。なので爺さんや両親は週末にしか家に帰ってこないのがちよつと寂しい。俺も物心付く前から小学校に入るまでは中東で少年兵として戦っていたのだが、義務教育があるため、小学校に入ってからはずつと日本で暮らしている。

だが大学を卒業したらすぐに世界に羽ばたけるように常日頃から鍛錬は欠かしていない。

俺は1歳の誕生日に両親から送られた愛銃のAK-47を手にも日も裏山で襲いかかってくる野犬の群れや猪の群れ、熊の大群を相手に戦闘訓練を続けていた。

3時間ほど訓練を続け、パンを口に咥え、「やだもー遅刻！今日も遅刻しちゃう！」と今日も学校へと足早に向かう。

だが今日は学校へとあと少しというところの曲がり角から飛び出したセーラー服の女の子にぶつかってしまった。

「きゃっー」

そんな可愛い声を出してぶつかった少女は体重差の関係で勢いよく転がり壁に叩きつけられ、ぶつけた頭を抱えて苦しんでいた。

だがセーラー服で倒れて転がっていったため、スカートが完全にめくれてしまい、うさぎさんの絵柄がプリントされたスキャンティが丸見えだった。しかも上着もはだけてしまいおへソまでこんにちはしている。

だが大丈夫。俺は紳士だったため無言でスマホを取り出し、ローアングルでじっくりと撮影しただけで手を出したりはしない。Yes ロリータN.O.タッチだ。だがよく見ると、そのセーラー服は俺の通う高校の制服ではないか。

おのれ、うさぎさんのスキャンティだから幼女かと思ったら同年代じゃねーか。金返せ。



「ねえ刹那！私と結婚して毎日うぐいすパン作って！」

「そのパン、この伊集院が1000万円で買い取ろう」

「だが断る」

「どうでもいいけどそろそろホームルーム始まるよ」

「ガリ勉野郎は黙ってろ！」

もうクラスは大盛り上がりだ。

だが俺はニヒルにこう言った。

「これは2個しかない。つまりタカシと梨沙の分だけさ」

その一言にタカシとジョージは感涙の涙を浮かべ俺へとハグしてきた。

タカシは野球部のエースで4番。

彼との出会いは数年前、高校入学式の朝だ。

当時2年だったタカシは新入生の俺が迷子になっているところを教室まで案内してくれた。当時の俺はまだ日本語が喋れず、エクスキューズミーと英語で通りすがりの先生や生徒に教室の場所を尋ねていたが、誰も英語が通じず相手にしてくれなかった。そんな俺を朝練帰りのタカシが流暢な英語で案内してくれたのがきっかけだ。タカシは駅前留学が趣味で英語が非常に堪能だった。そんな俺は日本語を覚えるまで金魚のフンのようにタカシの後ろにくっついて過ごす日々だった。

そして今年の春、同じクラスになった頃には俺たちはもう大親友になっていた。

彼からはいくつも大事なことを教わった。

和式便器の使い方から日本語まで、そして一番大事なこと。

それは諦めないことだ。

タカシは今ではエースで4番だが、高校入学時は一番の下手っぴだったそうだ。

毎年ずっとボール拾いばかり、ずっと補欠にすらなれずにいた。

だがタカシは諦めなかった。朝練や夜練、休日練習を欠かすことはなかった。毎朝素振り1万本をした。最初は深夜までかかった素振りを諦めずに毎日やり続け、今では1時間もかけずに1万本の素振り



を終えることができるようになった。

そんなタカシが2年生になった頃には野球部のエースで4番になっていたのは当然のことだろう。

俺もそんなタカシの諦めない心をリスペクトして日々の訓練に励むようになった。

いつか島津家再興を夢見て辛い訓練に耐え抜く。

いまの俺があるのもそんなジョージの熱いハートのおかげだろう。

そしてそんな俺を影で支えていてくれたのが梨沙だ。

だがそれは今は置いておく。

なぜならホームルームが始まったからだ。

俺らの学校は今どき珍しく第一時間目の前に30分のホームルームがある。これは早朝にしっかりと今日やるべきことを伝えることでそれぞれの計画を立てることを習慣化させるためらしい。なんでもこの学校の創立者が常に行き当たりばつたりの生活を繰り返した挙げ句、最後には大事な商談をすぽーんと忘れてしまい、競馬にのめり込み、全財産を使い果たし、その後借金まみれになり力ニ漁船で死ぬまで奴隷生活だったことを後悔し、生徒たちにはそんな苦勞をさせはならないと、学校を作ったときに毎日欠かさず朝一番にホームルームを行うことと決めたのがきっかけらしい。

そんなわけでホームルームの単位はとても厳しく、1回でも遅刻したら厳罰で、最悪留年も覚悟しないといけないらしい。でもま、本当にホームルームを落として留年したなんてやつは見たことがないが。だが高校で留年するやつってどうしようもないクズだろう。俺はそんなやつとは関わり合いにならないようにしているから気づかないだけかもしれない。

おつといけないいけない、またよそ事を考えていたらしい。

俺らの担任の沼田先生、通称ヌマセンはとても怒りっぽい熱血教師で、ホームルーム中によそ事を考えていようならすぐさま罵倒とチョークが飛んでくる。だがそんなヌマセンが今日はどこかおかしい。整髪料でテカテカしたいつもの七三分けを整えネクタイが曲がっていないか確認して、自慢のジャージに汚れがないかチェックして

いる。そしてちょっと頬が赤い。そして松田優作モデルのサンングラスを本人はかっこいいと思っているらしい仕草でスチャツと装着する。そしてヌマセンは深呼吸をして声を張り上げた。

「今日はみんなに新しいお友達を紹介する！転校生ちゃんだ！入れ！」

そしてヌマセンの掛け声に答えるようにガラリと教室のドアが開き彼女が入ってきた。

「はーーーーい！みんなー転校生の遠藤早苗でーす！」

溢れるような笑顔と愛らしい声、そしてセーラー服を翻しながら黒板の前まで駈けてきたのは、なんと登校のときにぶつかったウサギちゃんだった！

「おっおまえはーーーー！」

思わず俺はうさぎちゃんのスキャンティを握りしめて立ち上がり彼女を指さして叫んでしまった。

「あっあなたはは！！！」

彼女も俺のことに気づき、俺の握ったスキャンティを指さした。

そして運命の俺らは出会ってしまったのだ。

## 猛追！恐怖の徳川軍！

1限目が終わり休憩時間、俺は早朝訓練に使用したAK—47を分解整備していたら、転校生のうさぎちゃん、遠藤早苗が話しかけてきた。

「あんた、私のおパンツを返しなさいよね」

遠藤早苗は何やら訳が分からないことをいう。どうやら壁にぶつかったときに脳をやられたらしい。オーノー。

「あれは俺の戦利品だ。勝者が敗者から戦利品を奪うのはデュエリストとして当然の権利。それにあのスキヤンティは幼女が履いてこそ輝くのだ。10年若返ってから出直すんだな。おまえにも帰る家があるんだろう」

「うそっ！あなたもデュエリストなの！だってここら辺のデュエリストは3年前の戦いで全滅したって聞いていたのに」

3年前…この女、あの戦いのことを知っているのか。

俺は整備していたAK—47を放り出し、遠藤早苗から距離をとる。もし奴が敵対的なデュエリストならこの距離、もう能力の射程内だ。迂闊だった。俺以外に生き残りはいないと思いついていた。よそれから来るデュエリストの存在を考えていなかったとは。俺は気取られないようにゆつくりと奴から死角になっっている左手を背に回し、右肩甲骨にある俺の聖痕<sup>ステイグマ</sup>へと当てる。遠藤早苗もじりじりと距離をとり両手を奴の守護<sup>エターナルエレメント</sup>星座だろう、それをなぞるように動かしている。まさに一触即発の状態だ。

その光景を校舎の外、500メートルほど離れた鉄塔、その上部の方にある梁に立って眺めている男女二人がいた。

男は黒いコートを羽織りコートの下にはこれまた黒い全身タイツを着用した全身黒づくめ。サングラスをかけ煙草を咥えている。頭は剃っているのか髪は全くないスキンヘッドだが、斜めに走る異様な刀傷が頭部を印象的にしている。

女は逆にけばけばしい赤青黄色と原色を散りばめた原宿風といっ

たファッションで、整った顔立ちのためそのままならさぞかし男受けするだろうに、髪をバサバサにしてこれまた赤青黄色に乱雑に染め分け、両頬に蜘蛛のタトウを入れていて台無しにしている。

「始まったか。これもシナリオ通りというやつなのか」

男は苦々しげに顔を歪め、啞えた煙草を口から吐き捨てる。煙草は宙へと放物線を描き飛んでいくが横にいた女が指を鳴らすと一瞬にして燃え上って灰になってしまった。

「煙草のポイ捨て禁止だよ。前から言ってるけどそういう基本的な社会のルールを守れないやつって嫌いなよね」

女が呆れたように男へと文句を言う。

「それに下っ端のあたしらには上の考えなんて分かりっこないって。あたしらはただ起きたことを正確に記録し、提出するだけだよ。それでお給料もらえてるんだから問題ないじゃん」

「お前はそういう事ながら主義が過ぎるのが欠点だ。下っ端だからこそ常に時流を見据え、どんなイレギュラーが起きても対応できるようにする必要がある。いざ事が起きれば下っ端なんぞあつさりと見捨てられるんだぞ。結局最後に頼れるのは己だけだ。生き残るためには些細な情報から全体の流れを推測して立ち回る必要ってものが」

「はいはい、そういう小難しいことはあたしにはわっからなーいって。それにそろそろ始まるよ」

女は軽い口ぶりとは対照的に表情を真剣にして校舎を指さした。

「唸れ風神！空舞うエレメンタル！光すら捻じ曲げ全てを切り裂く猛き乙女よ！」

平穩の終わりは一瞬だった。

遠藤早苗の発動した術式が、不可視の風の刃が教室中に荒れ狂った。それによってタカシが、梨沙が、クラスメートたちが小間切れに切り裂かれていき、一瞬にして教室中は血煙に包まれた。

事象発現型能力か厄介な。守護星座使いだから召喚型かと思ったんだが。自己原罪型の俺とは相性が悪い。

だがぼやいている暇はなく風の刃は俺にも迫ってくる。

すぐさま聖痕を開放し、己の原罪を発現する。原罪により過敏になつた五感が見えないはずの風の刃を感知し、一つ、二つ、と避けていく。己の罪を自覚せよ。心の奥から響く声が俺の体を少しずつ塗り替えていく。そう、あれは暑い夏のこと。俺の家でクーラーが設置されている唯一のリビングで、裸になり汗を迸らせながらアクロバティックなオナニーをしていたのを梨沙と母親に見られた14の夏。それを今思い返しても猛烈な恥ずかしさにもだえ苦しむ。その恥ずかしさが俺の鼓動を何倍にも加速させる。その加速された心臓の鼓動が身体能力を格段に上げていく。思考速度は加速し、五感研ぎ澄まされ、血液を過剰に送り込まれた筋肉は数倍にも膨れ上がる。そして一瞬にして間合いを詰めた俺は、遠藤早苗の頭に殺人的な威力を秘めた拳をたたきつける。

だが、その拳は遠藤早苗の体をすり抜け、むなしく空を切る。

「ふふふ、残像よ」

背後から遠藤早苗の声が届く。

「残像…というか蜃気楼か。先ほどの風の刃と蜃気楼の多重詠唱だったってことか」

振り返ると教室の反対側に遠藤早苗が立っている。彼女の右目が金色に変色している。彼女は妖艶な笑みを浮かべ、そしてスカートの裾をつまみ、ゆつくりと其れをめくりあげていく。そして俺は彼女の

：  
そこまで書いたところで俺は顔を上げ、隣の席に座つた遠藤早苗に、

「そういえば、お前つて下の毛生えていたっけ？朝に脱がしたときはスキャンティに目が釘付けだったせいによく見てなかったんだが」

そうC o o lに問いかける。

「あんたは一体授業中に何聞いてくるのよド変態」

驚愕のまなざしを向けながら遠藤早苗が返す。

俺は自分が毎日欠かさず書いている自伝ノートを彼女に見せながら、下の毛が生えているかどうかがこの自伝のクオリティに欠かせな

い要因だと力説する。彼女は渡された自伝ノートを死んだ魚を見るような目で読み、そしておもむろに破り捨てる。

「おい何をするだ！それは大事な歴史的資料になるんだぞ！」

すぐさま俺は破れてバラバラになったノートをかき集め、丁寧に修復する。最近の若者はすぐに衝動的破壊行動を取ろうとする。こいつも例にもれずキレル若者というやつだったか。やはり俺の伝記で描写された彼女の行動は正しかったわけだ。

その後、キレル彼女から右ストレートを食らい、教師に見咎められ、二人仲良く廊下に立たされるわけだが、一旦ここで回想シーンは中断させてもらう。

現在、戦国時代にタイムスリップした俺の目の前には万を超える大群とたぬき武将が憤怒の表情で立っている。

「やあやあ我こそは三河の国の支配者、徳川家当主、徳川家康なるぞ！我が右腕、戦国最強の武者、本多忠勝を打ちとりし賊め！いざ尋常に勝負なり！」

そういつて手に持った屏風を天高く掲げ、俺へと勢いよく振り下ろす。

するとそれを合図に万を超す足軽が刀を抜き俺へと一斉に駆け出した。その迫力はすさまじく、足軽たちが地を蹴る度に地響きが鳴り響き、ぐらんぐらんと大地が揺れる。そして彼らの雄たけびは天へと響き、今までこの森のどこに潜んでいたのか、多くの鳥たちが一斉に羽ばたき空へと逃げだしていく。ただの賊ならもの一時間で全滅するであろう、その大軍を俺はどこか他人事のように見ながら冷静に手に持った凶器から空になったマガジンを抜く。

「奴の武器は南蛮渡来の種子島だ！一発撃つごとに装填せねばならず！10分は次の球が撃てないぞ！今のうちに叩き潰すのだ！」

たぬき武将、奴のいう事が正しいならたしかに直ぐにでも叩き潰されるだろう。徳川家康が俺のこれを指さしながら呵呵大笑する。

「確かに、俺のこれが種子島ならば弾込めに10分はかかる。熟練した兵士でもせいぜい8分つてところか」

俺は素早く腰の弾薬ポーチから弾が装填されたマガジンを取り出す。

「だが、あいにくだが、俺の持っているのは種子島なんかじゃない」俺から足軽兵たちの先頭まで、距離はおおよそ一キロメートル。全力で走っても一分半はかかる。それなら一分は余る計算だ。俺はそう考え、素早く銃にマガジンをあてがい、装填作業を進める。そしてちょうど30秒後。

連続した発砲音が戦場に木霊して、先頭30人が一斉に眉間から血を吹き出し倒れ伏す。

「俺のこれは種子島なんてチャチなものなんかじゃない。ロシアが生んだ最高の殺りく兵器、AK-47だ。装弾数30発。俺ぐらいの熟練兵なら30秒もあれば再装填できるのさ」

そして次の30人までが俺までたどり着くまでにさらに一斉射。そしてまた次の30人も：俺は冷静に淡々と装填と射撃を繰り返す。これなら足が速い分だけ猪の群れの方が厄介だな。俺は鬱蒼と広がるこの深い森の環境を利用して、時には木の上に登り、杖をしながら、またることにより通常の3倍の距離をジャンプして距離をとったり、または、他の枝に飛び移るなどして進行方向を読ませないようにし、殺到してくる徳川軍を分断しつつ、次々と各個撃破していく。もとより俺は市街地での戦いより山中でのゲリラ戦が得意だ。装填時間を使つて簡易的な落とし穴やツタを使った罠を作ることなどお手の物。現代のゲリラ戦法に戦国時代の足軽たちは為す術もなく、これらの罠の原理すら分からず幻術だ、妖術だと驚きながらもどんどんと引つかかっていく。更に俺は野犬の群れ用にAK-47に装着しているオプシヨンのグレネードランチャーも使い、更に効率よく足軽たちを吹き飛ばす。ぽんつとグレネードが飛ぶ軽い音が聞こえた後、耳をつんざくような爆音とともに、100人ほどの足軽が一斉に木っ端微塵に吹き飛ぶ。槍衾を作るために方陣を組んで固まっている敵兵にはこのような爆発武器が非常に有効だ。一心不乱に駆けてくる攻撃部隊は罠で、方陣で防御態勢を取っている部隊はグレネードランチャーで、そしてトドメとばかりにAK-47の銃弾が足軽の眉間を次々と

貫いていく。

そして、2時間後、俺の周りには万を超える屍がうず高く積み上がっていた。生き残った足軽は一人もおらず、残っているのは腰を抜かして青ざめているためき武将徳川家康のみ。

「お、お前の実力はわかった。これは実はお前の士官試験だったのだ。本多忠勝は本当に使いぬ武将でな。実は新しい武将を雇おうとここらへんのツワモノたちを試験してまわっておったのだ。そうだ、お前ならわしとともに天下を取れる。給金は年に金貨10枚をだそう。どうじゃ、損な話ではないじやろう。だからその物騒な種子島をしまつてくれ」

家康は恐怖のあまりに下半身を汚水で濡らして、顔は涙と鼻水でぐちゃぐちゃだ。こんな、こんな情けない奴に天下と取られ、俺のご先祖様たちは苦しめられたのか。あつけないような情けないような、そしてそれを上回る怒りがふつつつと湧いてくる。

「残念だが、俺はお前だけは絶対に許せないんだ。お前が曾祖父さんの両親にしたことを思い出しながら後悔して死ぬんだな」

「ひえええええ、何を言ってるのか分からんがしかたなかつたんじや！わしが悪かったから許してくれ」

俺はもう無言で家康の頭を吹き飛ばした。

「自分のしたことすら覚えてないとか、どうしようもないクズだろう」しかし、これで復讐は成った。

この時代に流れ着いて最初にエンカウントしたのがたまたま復讐相手だったとかご都合主義すぎる気がいなくてもないが、もし神という存在が俺をこの時代に送り込んだのだとしたら、この想いを果たすためだったのかもしれない。

「さて、これで終わりってわけじゃないよな。これからいったいどうするか」

このまま俺がいた時代にすんなり戻れるならいいのだが、そういうわけにも行かないだろう。そういえば家康はここが三河国と書いていたな。だとすると隣に名古屋県、いや今は尾張国があるんだったか。戦国時代といえれば織田信長だな。やつは平民でも能力があれば



取り立てるような先進的な武将だったはず。まずは衣食住を確保する必要があるので、織田に士官するのもいいかもな。確か三河は今川の手下。その三河を制圧したって手柄があるからちようどいい。

そして俺は尾張に向ってゆっくりと歩きだした。